

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：34414

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530878

研究課題名(和文)子育て環境が養育者の生きがい感形成プロセスに与える影響に関する実証的研究

研究課題名(英文)An experimental study on the influence of child-rearing environments on the processes of engendering a feeling of ikigai in parents

研究代表者

熊野 道子 (Kumano, Michiko)

大阪大谷大学・教育学部・准教授

研究者番号：20413437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル(以下、生きがい形成モデルとする)を構築し、乳幼児の養育者に適用して、乳幼児の養育者が生きがい感を形成する心理プロセスを明らかにすることである。これまでの実証的研究や文献研究を統合し、生きがい形成モデルを構築した。そして、生きがい形成モデルの測定尺度として、生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。さらに、子育て環境の相違として共働き家庭と専業主婦家庭の男女について、生きがい形成モデルに関する検討をした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to (1) construct a model of the processes of engendering a feeling of ikigai from a two-dimensional perspective of time and situations (referred to hereafter as the ikigai process model), and (2) apply the model to parents to clarify the psychological processes of developing this feeling of ikigai in those who raise children. Past experimental studies and a review of the literature using a perspective incorporating both time and situations were used to construct the ikigai process model.

Two scales of the ikigai process model were developed, including a scale for the processes leading toward a feeling of ikigai and a scale for the state of feeling ikigai; the reliability and validity of both were verified. In addition, the ikigai process model was applied to husbands and wives of dual-income families and those of families with full-time homemakers to examine the influence of child-rearing environments.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：生きがい感 生きがい状態 生きがいプロセス 子育て環境

## 1. 研究開始当初の背景

近年、幸福を高めることが、社会的にも心理学研究の潮流でも重要な課題となっている。欧米では、近年ポジティブ心理学が提唱され (Seligman, 2002 小林 訳 2004 ; Seligman & Csikszentmihalyi, 2000) 幸福を理解して築き上げることに注目した心理学研究が急増している (e.g., Lopes & Snyder, 2009 ; Snyder & Lopes, 2002) 。これらが日本に入ってきて (e.g., 堀毛, 2010 ; 島井, 2006) 欧米人と日本人の差異に関する文化心理学的研究が増えている (e.g., 唐澤・管, 2010 ; Uchida & Kitayama, 2009) 。そして、諸外国に比べ、日本人の幸福感が低いことが示されている (e.g., 内閣府経済社会システム, 2010) 。また、幸福の捉え方に対して、欧米人と日本人に差異があることが示されており (e.g., 大石, 2006 ; 内田, 2006) 。このような差異は、日本人が、幸福に含まれる意味とは異なる、生きがいという日本語独特の言葉を日常語としてもつことで説明できる (熊野, 2011) 。それゆえ、日本人の幸福を考える上では、日本人の伝統的な考え方を含み、幸福よりなじみのある生きがいを研究することが必須である。

これまでの生きがいに関する研究や考察を通じて、生きがいには2つの重要な側面があると考えている (熊野, 2011) 。それらは、(1) ポジティブな状況とネガティブな状況での生きがいには質的な差が考えられること (状況的側面) と、(2) 生きがいには、現在の状況だけでなく、過去の意味づけや未来の展望が大切と考えられること (時間的側面) である。この2側面からアプローチすることによって、生きがい形成のプロセスを明らかにすることができると考えている。

## 2. 研究の目的

### (1) 研究1 : 時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルの構築

生きがい形成を考える上で重要な時間と状況の2側面について、生きがいや幸福の代表的な理論の分析研究を行い、2側面で捉えることの有用性を明らかにする。

そして、生きがい形成を考える上で重要な時間と状況の2次元で捉えたライフイベントから生きがいを形成するプロセスに着目して、時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル (以下、生きがい形成モデルと呼ぶ) を構築する。

### (2) 研究2 : 生きがい形成モデルに関する実証研究

この生きがい形成モデルの構成概念である生きがいプロセスと生きがい状態を測定する尺度を作成し、両尺度の信頼性・妥当性

を検討する。そして、生きがいプロセスを経て生きがい状態に至ることを検討する。さらに、子育て環境の相違として設定した乳幼児の養育者4群 (共働き家庭と専業主婦家庭の男女) における生きがいプロセスと生きがい状態の相違を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究1 : 時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルの構築

最も代表的な生きがい論とされる神谷の生きがい論と、ポジティブ心理学で重要とされ、生きがいと類似した概念であるセリグマンの幸福論について、生きがい形成を考える上で重要な時間と状況の状況と時間の2側面から文献分析研究を行った。

そして、これまでの実証的研究や文献研究を統合し、時間と状況の2次元で捉えたライフイベントから生きがいを形成するプロセスに着目して、時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルを構築した。

### (2) 研究2 : 生きがい形成モデルに関する実証研究

この生きがい形成モデルの構成概念である生きがいプロセスと生きがい状態を測定するための尺度を作成し、成人期の30代846名 (男性418名、女性428名) に対してweb調査を行った。調査項目は、生きがいプロセス尺度、生きがい状態尺度、生きがい度 (単一尺度) 能動的・受動的生きがい感尺度などであった。さらに、子育て環境の相違として設定した乳幼児の養育者4群 (共働き家庭と専業主婦家庭の男女) に対してweb調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1 : 時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルの構築

#### 生きがいの2側面についての理論分析

神谷の生きがい論とセリグマンの幸福論について、生きがいの状況的側面と時間的側面から分析を行った。

神谷の生きがい論を状況的側面で分析した結果、ポジティブな状況での生きがいについては、平凡な日常の中で忙しく飛び回ることやささやかな事柄に生存充実感を感じるにより、生きがいを感じるが、それらは意識されないことも多いとなる。一方、ネガティブな状況での生きがいについては、まずそのネガティブな状況を受容し、徹底的に苦悩することにより生きがいを感じるようになる。徹底的な苦悩により、深い認識を

促され、新しい生き方を見出したり、意味や目標を創り出したりすることができ、生きる力を与えられることを述べている。神谷の生きがい論を時間的側面で分析すると、現在の自分の価値体系に基づいて、過去に対する意味づけ、未来の目標設定がなされ、現在に生きがいをもたらしているとまとめられる。

セリグマンの幸福論では、状況的側面については、セリグマンは、ネガティブな状況に対して、どのように受けとめるかで、幸福をもたらすかどうかが決まることを記述している程度である。セリグマンの幸福論を時間的側面で分析すると、過去の幸福は満足感や安堵感などであり、過去の捉え方によって過去に対する幸福を感じることができる。現在の幸福は快楽（瞬間的なポジティブ感情）と充足（時間感覚を失うほど没頭した意識状態や経験と関わりが深い活動）であり、未来は楽観や希望などであるとまとめられる。

神谷の生きがい論とセリグマンの幸福論といった先駆的な理論においても、時間と状況の2側面で捉えることにより、生きがいや幸福を明確に説明できることを示した。

#### 時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルの構築

これまでの実証的研究や文献研究を統合し、時間と状況の2次元で捉えたライフイベントから生きがいを形成するプロセスに着目して、時間と状況の2次元からみた生きがい形成モデルを構築した。

この生きがい形成モデルの1つ目の特徴は、定義が不明瞭になりがちであった生きがいに関する用語を明確に定義している点である。従来は、生きがいに関する用語のうち、生きがいをもたらす対象は生きがい対象として分離されていたが、残りの生きがいの要素には、生きがいを感じている精神状態と、その状態になるためのプロセスを指すものが混在していた。それを、前者を“状態としての生きがい感”（以下、生きがい状態とする）後者を“生きがい感へのプロセス”（以下、生きがいプロセスとする）と定義し、生きがいの要素を状態とプロセスの観点から明確に分離した。

本モデルの基本構造は、Figure1のように円錐で表され、生きがい重要と考えられる時間と状況の2次元を設定し、底面の様々なライフイベントから、生きがい対象となるものが選別され、生きがいプロセスを経て、生きがい状態を形成する心理プロセスを示している。生きがい状態は、生きがいの構造研究（熊野，2006）を基にして配置した。すなわち、生きがいの構造研究において、生きがいの要素は人生肯定感を核とする多層的な構造で表されたので、人生肯定感を核として頂点に配置し、次に中心的な要素となった存在価値感、人生の意味感、生存充実感を人生肯定感の周囲に配置した。

生きがい形成モデルの2つ目の特徴は、生

きがいプロセスに時間と状況の2次元を導入し、それぞれに關与する生きがいプロセスの要素を明確にした点である。過去には意味づけ、未来には目標意識、ポジティブ状況には没頭、ネガティブ状況には受容・対処を配置した。これらの要素は、神谷（1966）の生きがい論などの理論分析（熊野，2012）、生きがいの構造研究（熊野，2006）、過去やネガティブ状況を想定した実証研究（熊野，2012）により設定されたものである。

なお、この生きがい形成モデルの円錐の頂点から見下ろした簡略図を Figure2 に示す。

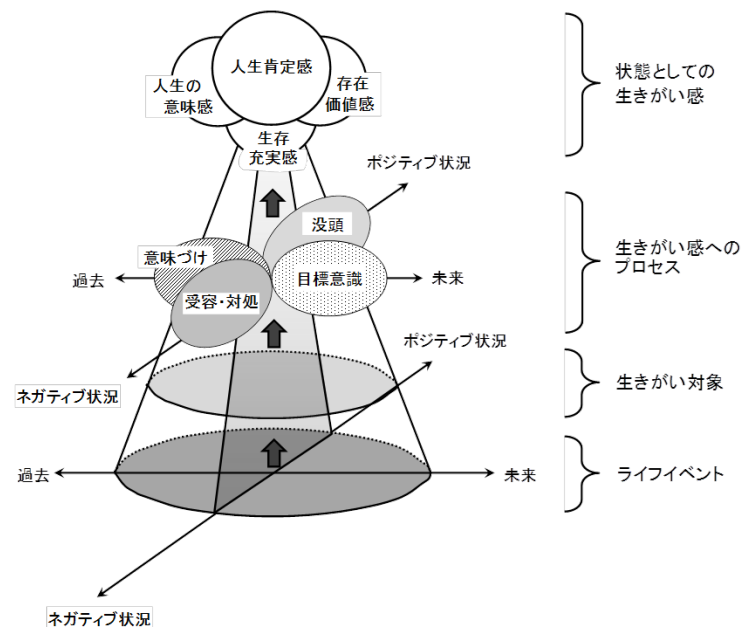


Figure1 時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル

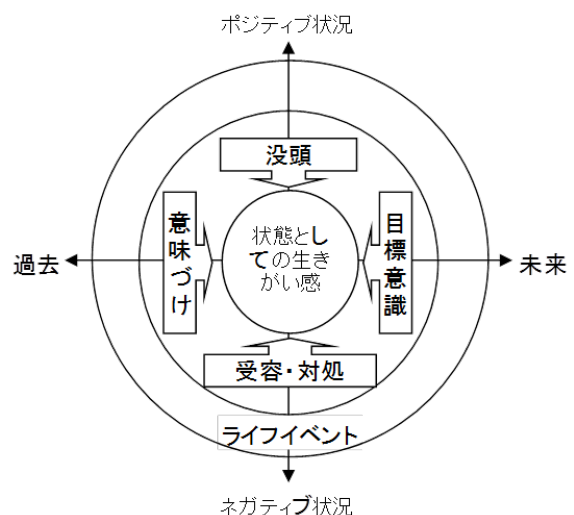


Figure2 生きがい形成モデルの簡略図 (円錐の頂点から見下ろした図)

## (2)研究2：生きがい形成モデルに関する実証研究

生きがいプロセス尺度・生きがい状態尺度の確認的因子分析

生きがい形成モデルの構成概念である生きがいプロセスと生きがい状態を測定するための尺度を作成し、成人期の30代に対してweb調査を行った。

生きがいプロセス尺度が設定した5因子構造であることの確認的因子分析を行った結果、適合度指標はGFI=.943, AGFI=.915, CFI=.966, RMSEA=.065であり、概ね満足に近い適合度であった。すなわち、生きがいプロセス尺度は、過去の意味づけ、未来の目標意識、ポジティブ状況の没頭、ネガティブ状況の受容、ネガティブ状況の対処の5因子構造であり、因子的妥当性が検証された。また、各下位尺度の係数は.81~.90と高く、各下位尺度の信頼性は高いことが確認された。

生きがい状態尺度が設定した4因子構造であることの確認的因子分析を行った結果、適合度指標はGFI=.914, AGFI=.860, CFI=.969, RMSEA=.099であり、概ね満足に近い適合度であった。すなわち、生きがい状態尺度は、人生肯定感、存在価値感、人生の意味感、生存充実感の4因子構造であり、因子的妥当性が検証された。また、各下位尺度の係数は.92~.94と高く、各下位尺度の信頼性は高いことが確認された。なお、因子間相関は.89~.97と非常に高く、互いに関連の強い要素であった。

生きがいプロセス尺度・生きがい状態尺度と生きがい度(単一尺度)の相関関係

生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度の妥当性を検証するために、両尺度と生きがい度(単一尺度)との相関係数を求めた。

生きがいプロセス尺度の各下位尺度と生きがい度は.43~.55と中程度の相関を示し、生きがい状態尺度の各下位尺度と生きがい度は.69~.77と強い相関を示した。すなわち、生きがい状態尺度は、生きがいプロセス尺度より、生きがいを感じる程度とより強い相関であった。生きがいプロセス尺度の測定しているものは、生きがい状態を感じるためのプロセスであるが、生きがい状態尺度の測定しているものは生きがいを感じている精神状態であり、生きがいを感じる程度は生きがいプロセス尺度より生きがい状態尺度の方がより関連深いと考えられる。本研究の結果により、このことが検証され、両尺度の妥当性が示された。

生きがいプロセス尺度から生きがい状態尺度への共分散構造分析

生きがいプロセスを経て生きがい状態に至ることを検討するために、共分散構造分析を行った。ネガティブ状況は、受容した後に対処することによって生きがい状態に至る

と考えられるから、ネガティブ状況の受容からネガティブ状況の対処へのパスを設定し、ネガティブ状況の対処から生きがい状態への影響を検討した。ネガティブ状況以外の3プロセスは、直接、生きがい状態に影響すると考えられるので、直接のパスを設定した。生きがい状態尺度は、4下位尺度と合計の5つの場合について、それぞれへの影響を検討した。

これらの5つのモデルの適合度指標は、GFI=.910~.917, AGFI=.870~.880, CFI=.941~.946, RMSEA=.078~.082であり、概ね満足に近い適合度が得られた。

生きがい状態尺度の合計のモデルにおいて、4プロセスすべての関与が統計的に認められ、未来の目標意識が最も高く(.29)、過去の意味づけ(.21)、ポジティブ状況の没頭(.19)が続き、ネガティブ状況の対処が最も低かった(.14)。すなわち、未来に目標意識をもつことで生きがい状態が高まり、過去を意味づけることやポジティブ状況で没頭することでも生きがい状態が高まった。また、ネガティブ状況でも、受容から対処へのパス係数は.89と高く、受容して対処することで、弱いながらも生きがい状態を高めていた。なお、生きがい状態尺度の各下位尺度では、合計とほぼ同様の傾向を示し、異なる点は、人生の意味感では未来の目標意識が最も強く関与し、生存充実感はポジティブ状況の没頭が最も強く関与し、存在価値感はポジティブ状況の没頭の関与が統計的に認められなかったことである。すなわち、目標意識をもつことが人生の意味感を高め、ポジティブ状況で没頭することが生存充実感を高める特徴がみられた。

このように、4つの生きがいプロセスのそれぞれが生きがい状態を高めることが確認され、生きがい形成モデルにおける生きがいプロセスから生きがい状態に至る部分が検証された。

乳幼児の養育者における子育て環境に関する検討

子育て環境の相違として設定した乳幼児の養育者4群(共働き家庭と専業主婦家庭の男女)に対してweb調査を行った。調査項目は、上記で作成された生きがいプロセス尺度、生きがい状態尺度などであった。そのデータの統計解析を行い、養育者4群での相違について検討した。今後、さらに子育て環境の相違として、ワーク・ライフ・バランス、就労の形態、祖父母のサポート、地域の支援など他の要素についても、本研究で開発された生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度を用いて検討し、生きがい形成に望ましい子育て環境を明らかにしていくことが望まれる。

## 結論

本研究では、生きがい形成モデルの構成概念である生きがいプロセスと生きがい状態

を測定する尺度を作成し、成人期の 30 代男女を対象とした調査を行い、両尺度の信頼性・妥当性を確認した。そして、生きがいプロセスから生きがい状態へ至る共分散構造分析を行った結果、生きがい形成モデルを検証することができた。子育て環境の相違として共働き家庭と専業主婦家庭の男女を検討したが、今後さらに、さらに子育て環境の相違として、他の要素についても、本研究で開発された生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度を用いて検討し、生きがい形成に望ましい子育て環境を明らかにしていくことが本研究で可能となった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計4件)

熊野道子 生きがい形成モデルの測定尺度の作成 - 生きがいプロセス尺度と生きがい状態尺度 - 教育研究, 査読無, 39, 1-11, 2013.

熊野道子 生きがいの2側面(状況的側面と時間的側面)についての理論分析 大阪大谷大学紀要, 査読無, 46, 40-48, 2012.

熊野道子 時間と状況の2次元からみた生きがい形成の価値過程モデル 教育福祉研究, 査読無, 37, 26-38, 2011.  
[http://www.osaka-ohtani.ac.jp/department/welfare/files/037\\_p26.pdf](http://www.osaka-ohtani.ac.jp/department/welfare/files/037_p26.pdf)

熊野道子 なぜワーク・ライフ・バランスが求められるか? - 東日本大震災後の日本における幸福感・生きがい感をめぐって - 企業年金, 査読無, 30(11), 8-9, 2011.

##### [学会発表](計1件)

熊野道子 生きがい形成モデルの測定尺度の作成 - 子育て世代を対象として - 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1010, 札幌コンベンションセンター・札幌市産業振興センター(札幌), 2013年9月20日.

##### [図書](計1件)

熊野道子 生きがい形成の心理学 風間書房, 2012, 188ページ.

##### [その他](計4件)

###### ・寄稿(計2件)

熊野道子 「生きがい感」や「幸福感」をめざして 学生相談室開設30周年記念誌 大阪大谷大学学生相談室, 依頼

有, 54-55, 2013.

熊野道子 著者による本の紹介 - 熊野道子著「生きがい形成の心理学」 - 高齢者のケアと行動科学, 依頼有, 17, 77, 2012.

###### ・研究会発表(計2件)

熊野道子 高齢者の生きがい形成 2012年11月老年心理学研究会 with 第20回臨床死生学・老年行動学研究会, 大阪大学中之島センター(大阪), 2012年11月7日.

熊野道子 生きがい形成に関する研究 - 時間と状況の2次元から 第391回関西社会心理学研究会(KSP), 大阪大谷大学(大阪), 2012年6月9日.

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

熊野道子 (KUMANO MICHIKO)  
大阪大谷大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 20413437

##### (2)研究分担者

なし

##### (3)連携研究者

なし